

# 原始仏典に見る人間観

## —チャラカ・サンヒターの人間観との比較研究—

長友泰潤

南九州大学 教養・教職センター 哲学研究室

2013年10月11日受付; 2014年1月27日受理

**The description of the exemplary brāhṃaṇa (priest) of the Dīgha-Nikāya and Sutta-Nipāta:  
Compared with the good life and the ideal doctor in Carakasamhitā**

Taijun Nagatomo

*Laboratory of philosophy, Minamikyusyu University,  
Miyakonojo, Miyazaki 885-0035, Japan*

Received October 11, 2013; Accepted January 27, 2014

**In the description of the exemplary brāhṃaṇa (priest) of the Dīgha-Nikāya and Sutta-Nipāta, those who have the knowledge of Veda, obey the law and the teachings of the scripture leave the falsehood and the arrogance are the good brāhṃaṇa.**

**In the description of the good life and the good doctor of the Carakasamhitā, those who are not afflicted with physical and mental ailments, who are endowed with youth, enthusiasm, strength, reputation, manliness, boldness, knowledge of arts and sciences, senses, objects of senses, ability of the sense organs, riches and various luxurious articles for enjoyment, who achieve whatever they want and move as they like, lead a happy life; others lead an unhappy life. Those who are the well-wishers of all creatures, who are truthful, peace loving, who examine things before acting upon them, who are vigilant, who serve the elders, who have full control over passion, anger, envy, pride and prestige, who are constantly given to various types of charity, meditation, acquisition of knowledge and quite life, who have full knowledge of the spiritual power and are devoted to it, lead a useful life, others do not. And one should serve the good doctor who are full of tranquility and have the knowledge of arts and sciences of the profession.**

**According to the above investigation, it can be maintained that there is a similarity between the view of the good life and the good doctor of the Carakasamhitā and the exemplary brāhṃaṇa (priest) of the Dīgha-Nikāya and Sutta-Nipāta.**

**Key words: Dīgha-Nikāya, Sutta-Nipāta, Carakasamhitā, brāhṃaṇa.**

### 序

原始仏典であるスッタニパータ (Sutta-Nipāta, 以下 SN)<sup>註1)</sup>には、修行者のあるべき姿やバラモンのあり方などについて書かれている。また、同じく原始仏典の種徳経として翻訳されている, *Soṇadaṇa-sutta*, (以下 SS), *Samaññaphala-sutta* (以下 SPS)<sup>註1)</sup>には、バラモンの賢者ソーナダダが、ブッダにバラモンであるための五つの資質を説明している場面が描かれている。そこで、これらの経典に現れるバラモンのあるべき

姿を検討し、その人間観をチャラカ・サンヒターの人間観・医者観と比較考察する。

### I. スッタニパータの人間観

スッタニパータの中には、バラモンとブッダの会話から始まるものがある。バラモンのバーラドヴァージャにブッダが説いたとされる、賤しい人とはどんな人かという説の中から、いくつか見てみよう。

まず、欲望や恥にかかわる賤しき人について、以下のように言われている。

「怒りやすくて恨みをいだし、邪悪にして他人

の美德を覆い、誤った見解を奉じ、たくらみのある人、一かれを賤しい人であると知れ。」(116)  
Kodhano upanāhi ca pāpamakhī ca  
yo naro vipannadiṭṭhi māyāvī, taṃ  
jaññā ‘vasalo’ iti<sup>注3)</sup>

「自分をほめたたえ、他人を軽蔑し、みずからの慢心のために卑しくなった人、一かれを賤しい人であると知れ。」(132)

Yo c ‘attānaṃ samukkamse parañ ca –m–  
avajānati nihīno sena mānena, taṃ  
jaññā...<sup>注4)</sup>

「ひとを悩まし、欲深く、悪い欲望があって、ものおしみをし、徳がないのに敬われようと欲し、恥じ入る心のない人、かれを賤しい人であると知れ。」(133)

Rosako kadariyo ca pāpiccho maccharī  
saṭho ahiriko anottāpī, taṃ jaññā...<sup>注5)</sup>

ここでは、怒りや恨み、欲等について説かれている。他人の美德を覆い、誤った見解を奉じ、たくらみのある人や、他人を軽蔑し、ものおしみをし、恥じ入る心のない人が賤しい人とされている、

次に、その当時、社会で実際に有り得たと思われる賤しき人について見てみよう。

「村や町を破壊し包囲し、圧制者として一般に知られる人—かれを賤しい人であると知れ。」(118)

Yo hanti parirundhati gāmāni nigamāni  
ca niggāhako samaññato, taṃ jaññā  
‘vasalo’ iti.<sup>注6)</sup>

「村にあっても、林にあっても、他人の所有物をば、与えられていないのに盗み心もて取る人、一かれを賤しい人であると知れ。」(119)

Gāme vā yadi vāraññe yaṃ paresaṃ  
mamāyitaṃ theyyā adinnaṃ ādiyati, taṃ  
jaññā – pe –<sup>注7)</sup>

「実に僅かの物を欲して路行く人を殺害して、僅かの物を奪い取る人、一かれを賤しい人であると知れ。」(121)

Yo ve kiñcikkhakamyatā panthasmim  
vajataṃ janaṃ hantvā kiñcikkham ādeti,  
taṃ jaññā...<sup>注8)</sup>

ここでは、当時の印度社会を反映するような賤しき人について説かれている。すなわち、町を破壊する圧制者、村や林で盗みをする人、道行く人を殺害する物取りが賤しき人とされている。

さらに、宗教者に対する、賤しき人について語られている。

「バラモンまたは道の人または他のものを乞う人を、嘘をついてだます人、一かれを賤しい人であると知れ。」(129)

Yo brāhmaṇaṃ vā samaṇaṃ vā aññaṃ vā pi  
vañibbakaṃ musāvādena vañceti,  
taṃ jaññā...<sup>注9)</sup>

「食事のときが来たのに、バラモンまたは道の人をことばで罵り、食を与えない人、一かれを賤しい人であると知れ。」(130)

Yo brāhmaṇaṃ vā samaṇaṃ vā bhattakāle  
upaṭṭhite roseti vācā na deti, taṃ  
jaññā...<sup>注10)</sup>

「目ざめた人(仏)をそしり、或いは出家・在家のその弟子をそしる人、一かれを賤しい人であると知れ。」(134)

Yo buddhaṃ paribhāsati atha vā tassa  
sāvakaṃ paribbājaṃ gahaṭṭhaṃ vā taṃ  
jaññā...<sup>注11)</sup>

「生まれによって賤しい人となるのではない。生まれによってバラモンとなるのではない。行為によって賤しい人ともなり、行為によってバラモンともなる。」(136)

Na jaccā vasalo hoti, na jaccā hoti  
brāhmaṇo, kammanā vasalo hoti, kammanā  
hoti rāhmaṇo.<sup>注12)</sup>

ここでは、バラモンやそれ以外の修行者、ブツダやブツダの弟子たちにたいする行為が賤しい人について説かれている。すなわち、それらの修行者に嘘をついたり、罵ったり、そしる人が賤しき人とされる。また、バラモンが生まれによってではなく、行為によってバラモンであるというブツダの言葉が示されている。

次に、慈しみについて語られている部分を見てみよう。

「究極の理想に通じた人がこの平安の境地に達してなすべきことは次のとおりである。能力あり、直く、正しく、ことばやさしく、柔和で、思い上がることのない者であらねばならない。」(143)

Karañiyam atthakusalena yan taṃ santam  
padaṃ abhisamecca: sakko ujū ca sūjū ca  
suvaco c’ assa mudu anatiṃāni,<sup>注13)</sup>

「足ることを知り、質素に暮らし、雑務少なく、生活もまた簡素であり、諸々の感官が静まり、聡明で、気負い立つこと少なく、諸々の(人の)家で食ることがない。」(144)

santussako ca subhara ca appakicco  
ca sallahukavutti santindriyo  
ca nipako ca appagabbho kulesu  
ananugiddho,<sup>注14)</sup>

「他の識者の非難を受けるような下劣な行いを決してしてはならない。一切の生きとし生けるものよ、幸福であれ、安泰であれ、安楽であれ。」(145)

na ca khuddaṃ samācare kiñci,  
yena viññū pare upavadeyyuṃ  
Sukhino vā khemino honku sabbe  
sattā bhvantu sukhittā:<sup>注15)</sup>

「何びとも他人を欺いてはならない。たとえどこにあっても他人を軽んじてはならない。悩まそうとして怒りの想いをいだいて互いに他人に苦痛を与えることを望んではならない。」(148)

Na paro paraṃ nikubbetha,  
nātimaññetha katthacinam  
kañci, vyārosanā paṭighasañña  
nāññamaññassa dukkham iccheyya.<sup>注16)</sup>

ここでは、慈しみについて説かれているが、その中で、慈しみを持つ者として、能力あり、直く、正しく、ことばやさしく、柔和で、思い上がることのない者で

あることや、またその人が、足ることを知り、質素に暮らし、雑務少なく、生活もまた簡素であること、他の識者の非難を受けるような下劣な行いは決してしないこと、他人を欺かず、軽んぜず、苦痛を与えないことが挙げられている。

## 小 結

SNでは、賤しい人について、怒りや恨み、欲等について説かれている。他人の美德を覆い、誤った見解を奉じ、たくらみのある人や、他人を軽蔑したり、ものおしみをし、恥じ入る心のない人が賤しい人とされる。また、当時の印度社会を反映するような賤しき人について説かれている。すなわち、町を破壊する圧制者、村や林で盗みをする人、道行く人を殺害する物取りが賤しき人とされる。さらに、バラモンやそれ以外の修行者、ブッダやブッダの弟子たちにたいする行為が賤しい人について説かれている。すなわち、それらの修行者に嘘をついたり、罵ったり、そしる人が賤しき人とされる。また、バラモンが生まれによってではなく、行為によってバラモンであるというブッダの言葉が示されている。

また、慈しみについても説かれている。その中で、慈しみを持つ者として、能力あり、直く、正しく、ことばやさしく、柔和で、思い上がることのない者であることや、またその人が、足ることを知り、質素に暮らし、雑務少なく、生活もまた簡素であること、他の識者の非難を受けるような下劣な行いは決してしないこと、他人を欺かず、軽んぜず、苦痛を与えないことが挙げられている。

## II. 種徳経 (SS, SPS) の人間観

### 1. SSに見られるバラモン観

まず、賢者ソーナダダが、ブッダに次のように述べる。

「五種類の資質〔をそなえた者〕とは、すなわち、母系、父系のいずれにおいても生まれ正しく、血統清浄にして、七世の父祖以来生まれに汚点なく、系統に関して他より非難されない者、ヴェーダ聖典をよく読み、聖句を記憶し、三つのヴェーダに精通し、語彙集、活用論、音韻論、語源論と第五としてヴェーダの口承史伝に通じ、聖典の語の区切りを知り、文法に通じ、世俗哲学に通じ、偉人のもつ特徴を完全に知っている者、容姿端麗で、美しく、立派で、蓮華のように優れた容姿の、ブラフマン神のような表情をし、ブラフマン神のような身体をもった、見目のすばらしい者、戒めを守り、戒めを増大し、増大した戒めをそなえている者、〔護摩の〕柄杓を持つ者のなかで、第一か第二の学識のある賢者です。」

云何爲五。一者婆羅門七世已來父母眞正。不爲他人之所輕毀。

二者異学三部諷相誦通利。種種經書盡能分別。世典幽微靡不綜練。

又能善於大人相法。明察吉凶祭祀儀禮。三者

顔貌端正。四者持戒具足。

五者智慧通達。是爲五。

Katamehi pañachi? Idha bho brāhmaṇo  
ubhato sujāto hoti mātito ca pītito  
ca saṃsuddha-gahaṇiko yāva sattamā  
pitāmahā-yugā akkhitto anupakkuṭṭho  
jāti-vādena Ajjhāyako hoti manta-dharo  
tiṇṇaṃ vedānaṃ pāragū  
sanighaṇḍuketubhānaṃ  
sakkharappabhedānaṃ itihāsa-pañcamānaṃ  
padako veyyākaraṇo lokāyata-mahāpurisa-  
lakkhaṇesu anavayo. Abhirūpo hoti  
dassanīyo pāsādiko paramāya  
vaṇṇapokkhaṇatāya samañnāgato brahma-  
vaṇṇī brahma-vaccasī akkhuddāvako  
dassanāya. Sīlavā hoti vuddha-sīlī  
vuddha-sīlena samannāgato. Paṇḍito ca  
hoti medhāvī paṭhamo vā dutiyo vā  
sujaṃ paggaṇhantānaṃ <sup>註17)</sup>

ここで述べられるバラモンの五つの資質とは、生まれに汚点なく、系統に関して誰からも非難されないこと、ヴェーダについての学問に精通し、偉人について知っていること、容姿端麗であること、増大した戒めをそなえていること、護摩用の柄杓を持ち学識をもつことである。これに対し、ブッダは問いかける。

「では、バラモンよ、この五種類のうち、一種類の資質を除いて四種類の資質をそなえた者を、バラモンと称することができますか。」  
頗有婆羅門於五法中捨一成四。亦所言誠實無有虛妄。得名婆羅門耶。

Imesaṃ pana brāhmaṇa pañcannaṃ  
aṅgānaṃ sakkā ekaṃ aṅgaṃ ṭhapayitvā  
catuhi aṅgehi samannāgataṃ brāhmaṇaṃ  
paññāpetuṃ. <sup>註18)</sup>

ここで、ブッダは、五種類の資質のうち、一つ減らして、四種類でもバラモンと称することができるかと問いかける。これに対して、ソーナダダは次のように答える。

「ゴータマさん、できます。なぜならば、ゴータマさん、この五種類の資質のうち、容色を除くことができるからです。…中略…ゴータマさん、以上、四種類の資質をそなえた者は、バラモンと称することができます。『わたしはバラモンである』といっても、妄語におちいらずにすみ、正しく語る者といえるのです。」

異学三部諷相誦通利。種種經書盡能分別。世典幽微靡不綜練。

又能善於大人相法。明察吉凶祭祀儀禮。顔貌端正。持戒具足。

智慧通達。有此四法。則所言誠實無有虛妄。名婆羅門耶。

Sakkā bho Gotama. Imesaṃ hi bho Gotama  
pañcannaṃ aṅgānaṃ vaṇṇaṃ ṭhapayāma.  
kiṃ hi vaṇṇo karissati? yato kho  
bho brāhmaṇo ubhato sujāto hoti  
mātito ca pītito ca saṃsuddha-

gahaṇiko yāva sattamā pitāmahā-  
yugā akkhitto anupakkuṭṭho jāti-  
vādena, ajjhāyako ca hoti manta-  
dharo tinnaṃ vedānaṃ pāragū  
sanighaṇḍu-keṭubhānaṃ sakkhara-  
ppabhedānaṃ itihāsa-pañcamānaṃ  
padako veyyākaraṇo lokāyata-  
mahāpurusa-lakkhaṇesu anavayo,  
sīlavā ca hoti vuddha-sīlena  
samannāgato, paṇḍito ca hoti  
iiimedhāvī paṭhamo vā dutiyo  
vā sujaṃ paggaṇhantānaṃ-  
imehi kho bho Gotama catuḥ’āṅgehi  
samannāgataṃ brāhmaṇā brāhmaṇaṃ  
paññāpentī, ‘Brāhmaṇo ‘smīti’ ca  
vadamāno sammā vadeyya na ca pana  
musā-vadaṃ āpajjeyyāti’<sup>注19)</sup>

ここで、ソーナダダは五種類のうち、容色を除くことができるかと答える。四種類の資質を持つ者、すなわち、生まれに汚点なく、系統に関して誰からも非難されない者、ヴェーダについての学問に精通し、偉人について知っている者、増大した戒めをそなえている者、護摩用の柄杓を持ち学識の者はバラモンであり、バラモンと称しても嘘を言ったことにならないことになる。このようなブッダによる同じ形式の質問が繰り返され、残った四種類の資質のうち、生まれに汚点なく、系統に関して誰からも非難されない者、ヴェーダについての学問に精通し、偉人について知っている者の二種類が除かれる。二人の問答を聞いていた、ソーナダダの仲間のバラモンたちは、尊者ソーナダダに、それでは、容色を軽んじ、ヴェーダ聖典を軽んじ、生まれも軽んじることになるのではないかと問う。ソーナダダはこれを否定し、バラモンとは、戒めを守り、戒めを増大し、増大した戒めをそなえている者のことであり、また、護摩の柄杓をもつ者の中で、第一か第二の学識のある賢者のことだと論ず。

さらに、ブッダは次のように質問する。

「では、バラモンよ、この二種類のうち、一種類の資質を除いて、ただ一種類の資質をそなえた者を、バラモンと称することができるでしょうか。」

若於二法中捨一成一。亦所言誠實無有虚妄。得名婆羅門耶。

Imesaṃ pana brāhmaṇa dvinnāṃ aṅgānaṃ  
sakkā ekaṃ aṅgaṃ ṭhapayitvā  
ekena aṅgena samannāgataṃ brāhmaṇaṃ  
paññāpetuṃ.<sup>注20)</sup>

ここで、ブッダは、二種類の資質、すなわち、戒めを守り、戒めを増大し、増大した戒めをそなえている者、〔護摩の〕柄杓を持つ者のなかで、第一か第二の学識のある賢者である者のうち、一つ減らして、一種類でもバラモンと称することができるかと問いかける。

「ゴータマさん（ブッダ）、そのようなことはありません。なぜならば、ゴータマさん、智慧は戒めによって清められ、戒めは智慧によって清めら

れるからです。戒めがあれば智慧があり、智慧があれば戒めがある。戒めをもつ者には智慧があり、智慧をもつ者には戒めがある。」  
戒即智慧智慧即戒。有戒有智然後所言誠實無有虚妄。我説名婆羅門。

No h’ idaṃ bho Gotama. Sīla-paridhotā  
hi bho Gotama paññā, paññā-paridhotam  
sīlaṃ yattha sīlaṃ tattha paññā,  
yattha paññā tattha sīlaṃ, sīlavato  
paññā paññāvato sīlaṃ.<sup>注21)</sup>

ここで、ソーナダダは戒めをもつ者には智慧があり、智慧をもつ者には戒めがあるという。すなわち、残りの二つの資質である、戒めを守り、戒めを増大し、増大した戒めをそなえている者と、護摩の柄杓をもつ者の中で、第一か第二の学識のある賢者は、二つともバラモンに必要な資質であるとする。これに続けて、ブッダは戒めと智慧について語り始める。

## 小 結

このSSの中で、バラモンの賢者ソーナダダがブッダにバラモンであるための五つの資質を説明している。すなわち、五種類の資質〔をそなえた者〕とは、すなわち、母系、父系のいずれにおいても生まれ正しく、血統清浄にして、七世の父祖以来生まれに汚点なく、系統に関して他より非難されない者、ヴェーダ聖典をよく読み、聖句を記憶し、三つのヴェーダに精通し、語彙集、活用論、音韻論、語源論と第五としてヴェーダの口承史伝に通じ、聖典の語の区切りを知り、文法に通じ、世俗哲学に通じ、偉人のもつ特徴を完全に知っている者、容姿端麗で、美しく、立派で、蓮華のように優れた容姿の、ブラフマン神のような表情をし、ブラフマン神のような身体をもった、見目のすばらしい者、戒めを守り、戒めを増大し、増大した戒めをそなえている者、〔護摩の〕柄杓を持つ者のなかで、第一か第二の学識のある賢者を指す。

このことから、バラモンとは、血統正しく、ヴェーダに精通し、容姿端麗で、戒めを守り、賢者である者を指すことになる。ブッダとの問答の中で、最終的に必要なものは、戒めと智慧に限定されるが、当時、最初の五つの資質がバラモンに必要なものと考えられていたことがわかる。

## 2. SPS におけるブッダの見たバラモン像

ブッダは、戒めについて、バラモンの賢者ソーナダダに詳しく説明していく中で、当時のバラモンの悪しき姿についても言及している。

「また、ある尊き道の人・バラモンたちは、信者から与えられた施し物を食べて〔生活しながら〕、次のように身を飾り、美しく化粧をして暮らしています。すなわち、香料を身体に塗ること、マッサージし、入浴し、木切れで身体を軽くたたき、鏡を用い、目の化粧水を用い、花飾りをつけ、顔に白粉・顔用の油をつけ、腕輪、首飾りを用い、飾りのある杖、葦の薬籠・剣・日

傘をたずさえ、彩色したサンダル・ターバン・寶石の冠・ヤクの尾の払子・長い房飾りのついた白い衣装をもちいるなど身を飾り、美しく化粧をして暮らしています。」

Yathā vā pan' eke bhonto samaṇa-brāhmaṇā  
saddhā-deyyānī bhojanāni bhuñjivā te  
evarūpaṃ maṇḍana vibhūsanatṭhānānuyogaṃ  
anuyuttā viharanti … seyyathīdam  
ucchādanam parimaddanam añjanam nahāpanam  
sambāhanam ādāsam añjanam mālā-vilepanam  
mukha-cuṇṇakam mukhālepanam hattha-  
bandham sikhā-bandham daṇḍakam nālikam  
khaggam chattam citrupāhanam uñhīsam  
maṇim vāla-vijaniṃ odātāni vatthāni  
dīghadasāni … iti vā iti <sup>注22)</sup>

ここでは、バラモンたちが、信者からの施し物をもって食べながら、花飾りをつけ、顔に白粉・顔用の油をつけたりして、身を飾り、美しく化粧をして暮らしているとされています。

また、次のように述べられている。

「また、ある尊き道の人・バラモンたちは、信者から与えられた施し物を食べて〔生活しながら〕、次のように低俗なうわさ話をして暮らしています。すなわち、王についての話、泥棒についての話、大臣、軍隊、恐怖、戦争、食べ物、飲み物、衣服、寝台、花輪、香料、親類、乗り物、村、町、都、地方、女〔や男〕、英雄などの話、また街角の世間話、井戸端での噂話、死者の話、取りとめのない雑談、世界の起源に関する話、海の起源に関する話、その場かぎりのあるとかないとかいった話、このように低俗なうわさ話をして暮らしています。」

Yathā vā pan' eke bhonto samaṇa-brāhmaṇā  
saddhā-deyyānī bhojanāni bhuñjivā te  
evarūpaṃ tiracchāṇa-katham senā-katham  
bhaya-katham yuddha-katham anna-katham  
pāna-katham vattha-katham sayana-katham  
mālā-katham gandha-katham nāti-katham  
yāna-katham gāma-katham nigama-katham  
nagara-katham janapada-katham itthi-  
katham purisa-katham sūra-katham  
visikhā-katham kumbaṭṭhāna-katham  
pubbha-katham nānatta-katham  
lokakkāyikaṃ samuddakkhāyikaṃ  
itibhavābhava-katham … iti vā iti <sup>注23)</sup>

ここでは、バラモンたちが、王についての話、泥棒についての話などの低俗なうわさ話をして暮らしているとされている。

さらに、次のように述べられている。

「また、ある尊き道の人・バラモンたちは、信者から与えられた施し物を食べて〔生活しながら〕、次のようないかがわしい呪術、よこしまな生活手段で生計をたてて暮らしています。すなわち、神の願かけをし、貢ぎ物を約束すること、その願がかなって約束を実行すること、秘教の呪文を唱えること、生殖力増大の術、不能にする術、

住居の位置の占い、住居の敷地を浄める術、口をすすぐこと、沐浴すること、供物を供えること、吐剤や下剤を飲ませて嘔吐させたり、下痢させたりすること、頭痛を和らげること、耳に油を塗ること、目薬を差したり、鼻の治療をしたり、洗眼したり、眼に薬用油を塗ったり、眼科治療、外科手術、小児科治療、木の根や葉草を煎じること、適当なときに薬を取り除いたりする仕事をして暮らしている。」

Yathā vā pan' eke bhonto samaṇa-brāhmaṇā  
saddhā-deyyānī bhojanāni bhuñjivā te  
evarūpāya tiracchāṇa-vijjāya  
micchājīrena jīvikam kappeniṭi …  
seyyasthīdam santi-kammaṃ paṇidhi-kammaṃ  
bhūri-kammaṃ bhūti-kammaṃ vassa-kammaṃ  
vossa-kammaṃ vatthu-kammaṃ vatthu-  
paṭikiraṇam ācamanam nāhāpanam juhanam  
vamanam virecanam uddha-virecanam  
adho-virecanam sīsa-virecanam kaṇṇa-telaṃ  
netta-tappaṇam natthu-kammaṃ añjanam  
paccañjanam sālākiyam sallakattikam  
dāraka-tikicchā mūla-bhesajjānam  
anuppānam osadhīnam paṭimokkha …  
iti vā iti <sup>注24)</sup>

ここでは、バラモンたちが、神の願かけをし、貢ぎ物を約束したり、秘教の呪文を唱えることなどの呪術的なことで暮らしをしていることや、目薬を差したり、鼻の治療をしたり、洗眼したり、眼に薬用油を塗ったり、眼科治療、外科手術、小児科治療を施すなど、医者としての役割をして暮らしていたことがわかる。

## 小 結

SPS では、尊き道の人・バラモンたちが、信者から与えられた施し物を食べて、生活しながら、花飾りをつけ、顔に白粉・顔用の油をつけたりして、身を飾り、美しく化粧をし、また、王についての話、泥棒についての話などの低俗なうわさ話をして暮らしているとされている。さらに、バラモンたちが、神の願かけをし、貢ぎ物を約束したり、秘教の呪文を唱えることなどの呪術的なことをし、また、目薬を差したり、鼻の治療をしたり、洗眼したり、眼に薬用油を塗ったり、眼科治療、外科手術、小児科治療を施すなど、医者としての役割をして暮らしているとされている。

これらのバラモンの暮らし方は、仏教の修行僧には、認められない生き方として示されたものであるが、バラモンの日常生活がよく伝わってくるものである。

## Ⅲ. チャラカ・サンヒター Carakasamhitā (以下CS) <sup>注25)</sup> の人生観との比較考察

まず、SN では、他人の美德を覆い、誤った見解を奉じ、たくらみのある人や、他人を軽蔑し、ものおしみをし、恥じ入る心のない人が賤しい人とされる。また、当時の印度社会を反映して、町を破壊する圧制者、村や林で盗みをする人、道行く人を殺害する物取りが

賤しき人とされる。さらに、バラモンやそれ以外の修行者、ブッダの弟子たちにたいする行為が賤しい人について説かれている。修行者やブッダ、ブッダの弟子に嘘をついたり、罵ったり、そしる人が賤しき人とされる。また、バラモンが生まれによってではなく、行為によってバラモンであるというブッダの考えが示されている。

また、SSの中で、バラモンとは五種類の資質をそなえた者とされている。すなわち、母系、父系のいずれにおいても生まれ正しく、血統清浄にして、七世の父祖以来生まれに汚点なく、系統に関して他より非難されない者、ヴェーダ聖典をよく読み、聖句を記憶し、三つのヴェーダに精通し、語彙集、活用論、音韻論、語源論と第五としてヴェーダの口承史伝に通じ、聖典の語の区切りを知り、文法に通じ、世俗哲学に通じ、偉人のもつ特徴を完全に知っている者、容姿端麗で、美しく、立派で、蓮華のように優れた容姿の、ブラフマン神のような表情をし、ブラフマン神のような身体をもった、見目のすばらしい者、戒めを守り、戒めを増大し、増大した戒めをそなえている者、〔護摩の〕柄杓を持つ者のなかで、第一か第二の学識のある賢者を指す。

CSには、幸福な人生と不幸な人生に、そして有益な人生と無益な人生について言及がある。<sup>注26)</sup> すなわち、幸福な人生とは、肉体的および精神的病気に冒されていない人、とりわけ、若々しさを保持している人、能力にふさわしい力と勇気と名誉と男らしさと大胆さをもっている人、知識、学問、感覚機能、感覚機能の対象に対して大きな力をもって生活している人、巨額の富と楽しみを享受し、あらゆる仕事に成功し、思いのままに行動する人、このような人に存在するとされる。これらとは反対の人々には不幸な人生があるとされる。<sup>注27)</sup>

また、有益な人生とは、あらゆる生物の福利を望む人、他人の財産を欲しがらない人、真実を語る人、平安を旨とする人、反省する人、軽率でない人、義務、財、愛からなる人生の三つの目的を互いに矛盾なく手に入れる人、尊敬に値する人を尊敬する人、知識と学問と心の平和を自分のものとしている人、老人をいたわる人、愛欲、怒り、妬み、慢心、誇りの感情をよく制御する人、常にいろいろな布施を行う人、常に苦行し、知識をもち、心の安定している人、最高我を知る人、物事に専念する人、この世とあの世をよく考える人、記憶力と思慮にたけた人に存在するとされる。また、これらの反対の人々の人生は無益であるとされる。<sup>注28)</sup>

これらのCSに見られる言及の中で、幸福な人生を送る人の条件である、知識、学問、感覚機能、感覚機能の対象に対して大きな力をもって生活している人と、有益な人生の条件である、知識と学問と心の平和を自分のものとしている人、知識をもち、心の安定している人、最高我を知る人、物事に専念する人、この世とあの世をよく考える人、記憶力と思慮にたけた人という内容は、SSの言うバラモンの五つの資質のうち、ヴェーダ聖典をよく読み、聖句を記憶し、三つのヴェーダに精通し、語彙集、活用論、音韻論、語源論と第五としてヴェーダの口承史伝に通じ、聖典の語の

区切りを知り、文法に通じ、世俗哲学に通じ、偉人のもつ特徴を完全に知っている者という部分や、護摩の柄杓を持つ者のなかで、第一か第二の学識のある賢者であるという部分と類似している。また、有益な人生の条件である、愛欲、怒り、妬み、慢心、誇りの感情をよく制御する人というのは、SSで言う、戒めを守り、戒めを増大し、増大した戒めをそなえている者という部分と類似している。

SNにおいても、慈しみを持つ者として、能力あり、直く、正しく、ことばやさしく、柔和で、思い上がることの無い者であることや、またその人が、足ることを知り、質素に暮らし、雑務少なく、生活もまた簡素であること、他の識者の非難を受けるような下劣な行いは決してしないこと、他人を欺かず、軽んぜず。苦痛を与えないことが挙げられており、CSの中の、あらゆる生物の福利を望む人、他人の財産を欲しがらない人、真実を語る人、平安を旨とする人、反省する人、軽率でない人、老人をいたわる人、愛欲、怒り、妬み、慢心、誇りの感情をよく制御する人、常にいろいろな布施を行う人に有益な人生があるという考え方と類似している。

また、CSでは、それぞれのカーストの人々のあり方について述べられる。<sup>注29)</sup> すなわち、バラモンは一切衆生の救済のために、クシャトリアは自己を保護するために、ヴァイシャは生業のために、また、上位三カーストのすべての人は義務と財と愛を確保するためにアーユルヴェーダを学ぶべきであるとされる。SSでもバラモンは三つのヴェーダに精通しとあるので、当然、アーユルヴェーダも学ぶべきものであったと考えられる。

また、CSでは、これらの三カーストの人々のうち、最高我を知る人々、義務の道にいそしむ人々、義務を伝導する人々が、アーユルヴェーダ実践者であり、父母兄弟縁者、師匠などの病気を鎮静することに努力をし、アーユルヴェーダに述べられている最高我について瞑想し、他人に知らせ、それに従って身を処することが彼らの最高の義務であるとされる。<sup>注30)</sup> 続けて、財、愛について説明される。まず、財とは、主君や長者からじきじきに、彼らの健康を守ったという理由で財貨が与えられたり、自分を保護してもらえ、あるいは自分に保護を求めてきた人々を病気から救済してやることであるとされる。そして、愛とは、有識者に認められているという名誉、他人から頼られること、評判がよいこと、自分の好きな人々と健康を分かち合うこととする。<sup>注31)</sup>

ここで、人々を病気から救済してやるのが挙げられているが、SPSでも、バラモンが目薬を差したり、鼻の治療をしたり、洗眼したり、眼に薬用油を塗ったり、眼科治療、外科手術、小児科治療を施すなど、医者としての役割をしていたとされるので、共通している。

さらに、CSでは良い医者と悪い医者についての言及が見られる。まず、悪い医者については、邪悪な医者という災厄は大混乱を生ずるものであり、穀物などを食い荒らすウズラの大群のようなもので、知らないうちに突然襲いかかってくると述べられている。邪悪な医者に対しては、その優劣を見分けるために、前置

きのな会話において、八つの質問を投げかけるべきとされる。また、良い医者の能力、すなわち、真に医学を知っているものの能力はその間においても発揮されると言う。<sup>注32)</sup>

さらに、悪い医者に入れられる未熟な医者の様子について述べられる。すなわち、医学の体系全体の一部しか知らず、体系において能力のない連中は、ちょうどウズラが弓の弦の音を聞いただけで逃げ出すように、タントラという言葉を聞いただけで逃げていくと言われる。また、牛などの弱い動物たちのなかで、ある動物は仲間の連中が弱いので狼のごとくふるまうが、彼はほんとうの狼に近づくと本性をあらわすと言われる。<sup>注33)</sup>

また、悪い医者は、おしゃべりという手段をもって、信頼されるような位置に自分の身を置いている無知な人でもあるが、真に信頼される人に会うとおじけづいてしまうとされる。また、無知で学問のない医者というものは、ちょうど自分を大きく見せるために羊毛で身を覆った犬のようなものであり、優れた医者との対話においては何も言えなくなるとされる。<sup>注34)</sup> また、無学であっても行いは実践者としては優れている医者に対しては、良い医者は議論で打ち負かしてはならず、むしろ、学問があるとうぬぼれているような連中を、最初に八つの質問によってやっつけるべきであるとされる。また、無知でうそつきで口先ばかりの連中はたいてい、脈絡のない無駄口を多く語るものであり、口数少なく誠実な人は、道筋の通ったことをほどほどに語るものであると言われる。<sup>注35)</sup>

さらに、良い医者は医学知識をひろめるためには我欲を捨て、学問も知識も乏しいのに、おしゃべりを常とするような論者どもを容赦してはならないとされる。また、一切衆生に対する思いやりを旨とし、真理を知ることを第一とし、同情心をもっているような人々の思いは、誤った学説を阻止することにもつら向けられると言われる。<sup>注36)</sup>

医者の中で、誤った学説や質問されると今は時機ではないとか身体の具合が悪いのでと逃げ口上を言うことや、うそやこけおどしを方便とし、他人を中傷する人は、たいてい自身の学問において未熟であるとされる。また、このような学問を汚す連中は死神の罠に等しいものであるからさけるべきであり、冷静さと知恵と学問に満たされている医者は最も医者らしい人として尊敬されるべきであると言われる。あらゆる不幸は、無知に基づき、あらゆる幸福は汚れない知恵に基づいていると言われる。<sup>注37)</sup>

このような良い医者と悪い医者についての言及は、SN や SS、SPS には見られないものであるが、バラモンの理想として、聖典の語の区切りを知り、文法に通じ、世俗哲学に通じ、偉人のもつ特徴を完全に知っている者であることが挙げられているので、冷静さと知恵と学問に満たされている医者は最も医者らしい人として尊敬されるべきであるとする CS の言及と矛盾しない。

## 結 論

CS と SN や SS、SPS に見られるバラモンについての言及を比較検討すると、CS に見られる言及の中で、幸福な人生を送る人の条件である、知識、学問、感覚機能、感覚機能の対象に対して大きな力をもって生活している人ということや、有益な人生の条件である、知識と学問と心の平和を自分のものとしている人、知識をもち、心の安定している人、最高我を知る人、記憶力と思慮にたけた人であることなどは、SS の言うバラモンの五つの資質のうち、ヴェーダ聖典をよく読み、聖句を記憶し、三つのヴェーダに精通し、語彙集、活用論、音韻論、語源論と第五としてヴェーダの口承史伝に通じ、聖典の語の区切りを知り、文法に通じ、世俗哲学に通じ、偉人のもつ特徴を完全に知っている者という部分や、護摩の柄杓を持つ者のなかで、第一か第二の学識のある賢者であるという部分と類似している。

また、有益な人生の条件である、愛欲、怒り、妬み、慢心、誇りの感情をよく制御する人というものは、SN の中で、慈しみを持つ者として示されている、能力あり、直く、正しく、ことばやさしく、柔和で、思い上がることのない者であることや、またその人が、足ることを知り、質素に暮らし、雑務少なく、生活もまた簡素であること、他の識者の非難を受けるような下劣な行いは決してしないこと、他人を欺かず、軽んぜず、苦痛を与えないこと等のあるべき姿と類似している。また、SS で言う、戒めを守り、戒めを増大し、増大した戒めをそなえている者という部分とも類似している。

さらに、CS では上位三カーストのすべての人は義務と財と愛を確保するためにアーユルヴェーダを学ぶべきであるとされているが、SS でもバラモンはヴェーダ聖典をよく読みとあるので、アーユルヴェーダも学んでいと想像される。そして、CS にはバラモンのあり方として、人々を病気から救済してやる事が挙げられているが、SPS でも、仏教側からは、あるべき姿ではないとされているが、バラモンが目薬を差したり、鼻の治療をしたり、洗眼したり、眼に薬用油を塗ったり、眼科治療、外科手術、小児科治療を施すなど、医者としての役割をしていたとされるので、共通している。

しかし、良い医者と悪い医者についての言及は、SN や SS、SPS には見られないものであるが、バラモンの理想として、聖典の語の区切りを知り、文法に通じ、世俗哲学に通じ、偉人のもつ特徴を完全に知っている者であることが挙げられているので、冷静さと知恵と学問に満たされている医者は最も医者らしい人として尊敬されるべきであるとする CS の言及と矛盾しない。

## 摘要

CSに見られる言及の中で、幸福な人生を送る人の条件と有益な人生の条件に見られる内容は、SNの慈しみを持った者のあるべき姿や、SSで言うバラモン（バラモン）の五つの資質のうち、ヴェーダ聖典をよく読み等の内容と類似している。さらに、CSにはバラモンのあり方として、人々を病気から救済することが挙げられている。SPSでは、仏教側から修行者としてあるべき姿ではないものとして指摘されている、眼科治療、外科手術、小児科治療を施すなど、医者としての役割をバラモンが果たしていたとされるので、ここは共通している。また、CSにある良い医者と悪い医者についての言及は、SNやSS、SPSには見られないものである。しかし、SSにもバラモンの理想として、世俗哲学に通じ、偉人のもつ特徴を完全に知っている者であることが挙げられているので、冷静さと知恵と学問に満たされている医者は最も医者らしい人として尊敬されるべきであるとするCSの言及と矛盾しない。

## 注記

- 1) Sutta-Nipāta (以下 SN). ed. by D. Andersen and H. Smith (Pali Text Society) Oxford 1997
- 2) Sonadaṇḍa-sutta, (以下 SS) Samaññaphala-sutta (以下 SPS) Dīgha Nikāya I. ed. by T.W. Rhys Davids and J.E. Carpenter (Pali Text Society) 2007 Lancaster. 種徳経 (SS) は、長阿含経卷十五、第二十二、大正大蔵経一、九四上—一九六中に相当する。
- 3) SN. p.21 II.23-24 中村元『ブツダのことは』岩波書店 1981 p.29 参照
- 4) SN p.23 II.6-7. 中村上掲書 p.31 参照
- 5) SN p.23 II.8-9. 中村上掲書 p.31 参照
- 6) SN p.22 II.1-2. 中村上掲書 pp.29-30 参照
- 7) SN p.22 II.3-4. 中村上掲書 p.30 参照
- 8) SN p.22 II.7-8. 中村上掲書 p.30 参照
- 9) SN p.22 II.25-27. 中村上掲書 p.31 参照
- 10) SN p.23 II.1-2. 中村上掲書 p.31 参照
- 11) SN p.23 II.10-11. 中村上掲書 p.31 参照
- 12) SN p.23 II.15-17. 中村上掲書 p.31 参照
- 13) SN p.25 II.7-10. 中村上掲書 p.33 参照
- 14) SN p.25 II.11-14. 中村上掲書 p.33 参照
- 15) SN p.25 II.15-18. 中村上掲書 p.33 参照
- 16) SN p.26 II.5-8. 中村上掲書 p.33 参照
- 17) SS §13. p.120.II.12-23 中村元監修 「原始仏典」、春秋社 第一巻、p.175 参照。大正大蔵経一、九六上 pp.2-7
- 18) SS §14. p.120. II.27-29 中村上掲書、第一巻、p.175 参照。大正大蔵経一、九六上 pp.7-9
- 19) SS §14.p.120.I.32～p.121.I.10 中村上掲書、第一巻、pp.175-176 参照。大正大蔵経一、九六上 pp.11-15
- 20) SS §21. p.123.II.30-32 中村上掲書、第一巻、p.179 参照。大正大蔵経一、九六中 pp.12-14
- 21) SS §21. p.124.II.1-3 中村上掲書、第一巻、p.179 参照。大正大蔵経一、九六中 pp.14-16. ここで、ソーナダダが言っている「智慧は戒めによって清められ、戒めは智慧によって清められるからです。」という内容は、大正大蔵経の種徳経では、ブツダの言葉として、「戒能淨慧慧能淨戒。」と記されている。
- 22) SPS D.ii. §51. p.66.II.3-11 中村上掲書、第一巻、pp.184-185 参照。中村上掲書では種徳経として翻訳されているが、上記の Pali Text Society では Samaññaphala-sutta (SPS) に含まれる。大正大蔵経の種徳経には、このようなバラモンについての詳細な言及はない。
- 23) SPS §52. p.66.II.13-23 中村上掲書、第一巻、p.185 参照。大正大蔵経の種徳経には、このようなバラモンについての詳細な言及はない。
- 24) SPS §62. p.69.II.19-29 中村上掲書、第一巻、p.185 参照。大正大蔵経の種徳経には、このようなバラモンについての詳細な言及はない。
- 25) Carakasamhitā (以下 CS) ed. by V.Bh.Sharma, Chowkhamba Sanskrit Studies, Varanasi 1988.VOL. XCIV. 矢野道雄『インド医学概論』(科学の名著第Ⅱ期)昭和63年 朝日出版 長友泰潤「チャラカ・サンヒターのプラナー説 —他学派の見解との比較考察—」論集 (印宗学会) 第38 2012
- 26) CS. Vol.I. p.598, II.4-7. 矢野上掲書 p.232 参照
- 27) CS. Vol.I. p.599, II.23-27. 矢野上掲書 p.232 参照
- 28) CS. Vol.I. p.599, II.27-31. 矢野上掲書 p.232 参照
- 29) CS. Vol.I. p.603, II.29. 矢野上掲書 p.234 参照
- 30) CS. Vol.I. p.603, II.29-33. 矢野上掲書 p.234 参照
- 31) CS. Vol.I. p.603, II.33-36. 矢野上掲書 pp.234-235 参照
- 32) CS. Vol.I. p.615, II.21-24. 矢野上掲書 p.239 参照
- 33) CS. Vol.I. p.615, II.25-26. p.616, II.7-8. 矢野上掲書 p.239 参照
- 34) CS. Vol.I. p.616, II.9-12. 矢野上掲書 p.239 参照
- 35) CS. Vol.I. p.616, II.13-16. 矢野上掲書 p.239 参照
- 36) CS. Vol.I. p.616, II.17-20. 矢野上掲書 p.239 参照
- 37) CS. Vol.I. p.617, II.17-20. 矢野上掲書 p.239 参照